

広島県立黒瀬特別支援学校

教育相談だより

第63号 令和3年10月6日

すっかり秋めいた、過ごしやすい毎日になりましたが、先の見えないコロナ渦においては、対策に神経を使わざるを得ない日が続いています。子どもも教員もストレスが溜まりますね。

文化祭の一般公開は中止になりました。

昨年に引き続き、コロナ対応のため、一般公開を中止せざるを得なくなりました。6月のオープンスクールも中止になり、これから本校を進路先に考えている方に、本校を見学していただく機会を提供できないことは心苦しく思います。引き続き、本校ホームページには「学校紹介動画」を10月まで公開していますので、是非御覧ください。

書籍紹介 「絵で見てわかる！視覚支援のカード・教材 100」

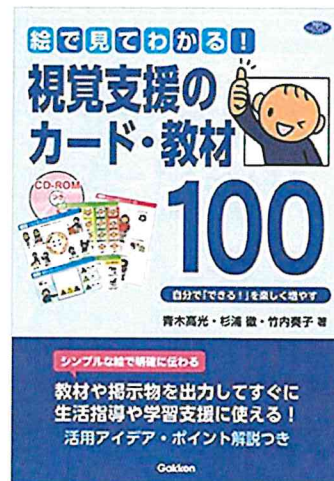
青木高光・杉浦徹・竹内奏子 著 Gakken

皆さんの学校でも「視覚支援」は今や当たり前に行われていることでしょう。ただ、様々なツールを駆使しても「使ったのにうまくいかない。」という経験をされた方もいると思います。「視覚支援の効果がない」と思いがちですが、そうではなく、視覚支援以前に支援そのものの考え方が間違っていないでしょうか。視覚支援は「子どもがやりたくないことをやらせる道具ではない。」ということです。まず、「子どもたちにとって、わかって安心できるためのツール」でないといけません。

視覚支援をすれば、子どもたちにとって無理な課題ができるようになるわけではありません。子どもたちの力に合っていない、「今はまだ無理な課題」がたくさんあるのではないのでしょうか。

わからなくて困っている子には「わかる」環境と「できる」経験が必要です。そのために必要なのは、スモールステップです。どの絵で説明したらわかるかな？まだ難しいかな？というやり取りをしていくと、必然的に絞り込んだ情報伝達になり、スモールステップになります。

この本はシンボル・ライブラリ「ドロップス」に携われた方が、日常生活の場面から学習のサポートまで、幅広いシーンで求められるシンボル（イラスト）を用いた絵カード・教材のアイデアが紹介されています。またうれしいことに、データCD-ROMが付属されていて、気になるページを印刷してすぐに使ったり、カードにしたりすることができます。また、コラムには、視覚支援を使い慣れた方にも、「単にスキルのなものを求めない」「大人が求める高すぎる基準にしない」「子ども一人ひとりの状況に合わせて楽しく考えていこう」等あらためて気づくようなポイントが、ちりばめられています。



黒瀬特支エキスパートの紹介(3)

小学部「わかって動ける」ための工夫

小学部の子どもたちが授業で「わかって動ける」ための支援では、視覚的な支援が必須です。一つ一つを言葉で指示することでは、支援者がずっとその児童の側に付き、手を取って工作を「させる」こととなります。担任が目指したのは児童が自分で手順を確かめながら、自分の進度で進めていけること。そのために手順カードを用意するのはもちろんですが、今回はそこに一工夫を加えることで、自分の判断で確実に進度を確かめ、かつ肯定感を得ながら工作を進めていけるようになってきます。その工夫を紹介します。



授業の初めに

授業の初めには、体を動かす時間をとっています。いきなり座ることから始めずに、体を動かすことで、後の内容に落ち着いて望めています。「ウンチーズ(体操)楽しい！」と子どもの声です。

手順カード+α

工作の手順カードです。上から順番にやることが並べてあり、終わったらはがしていくのですが、はがすと花丸が出てくるようになっていました。手順があっていることを確かめることができます。また、子どもたちがカードをはがすときに、カードを抜いてもいいし、カードスリーブごととってもいいように、マジックテープで四隅を止めてあります。子どもの実態に合わせた、細かい配慮です。



自分の力で自分のペースで

先生の指示がなくてもカードを見て「わかって動けて」います。常にそばに置いて確認できることで、安心して作業を続けることができます。



今回作った作品はカラーストローで飾り付けたランプです。子どもたちは「自分で作れた」喜びを表していました。授業の前準備を念入りすることで、その場では担任が細かな指示を出すことなく、子どもたちは作ることに熱中しています。子どもたちに「失敗をさせたくない。自分で作る喜びを」の担任の思いから生まれた工夫でした。